

過保護な兄

かるな

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは二人の妹を持つ兄の、過保護な日常物語。

目次

第1話	1
第2話	6
第3話	11
第4話	17
第5話	25
第6話	30
第7話	37
第8話	43
第9話	51
第10話	57
第11話	63
第12話	72
第13話	79

第1話

ここは東京のとある大学。その敷地内には様々な棟があり、平日の午前中である今現在はそこから中で講義が行われている。

「今日はここまでだ」

教授の声により午前最後の講義が終了した。多くの学生が部屋を後にする中、二人の男女学生がまだ残っていた。男の方は熱心にスマホを操作しており、もう一人はそれを隣で見ながらウンザリとした表情をしていた。

教室に残っているのが彼らだけになった時、講義が終わってからひたすらスマホを操作していた青年が満足気な表情をしながら席を立ち、その場を離れようとした時だった。

「ねえ、真琴」

隣で彼を見ていた女子学生が声を掛け、呼び止めたのだ。真琴と呼ばれた男子学生は、きよとんとした表情で振り返る。そこにはこちらを見ながら何やら不貞腐れた表情をしている彼女がいた。

「私に何か言うことあるでしょ?」

そう言われるものの、彼女に対して何かした覚えの無い彼は、小さく首を傾げる。身長165cm程、さらに童顔である彼のその行動は、一見小動物を想像させるほど可愛らしいものだった。

「菜々香、いつから居たの?」

菜々香と呼ばれた少女は、自分の想像していたのとは全く違う言葉が聞かされ、今まで何とか抑えていた怒りを顕にした。

「い・つ・か・ら・く・？ 最初から居たわよ！何ならアンタと一緒にこの教室まで来て！講義を受けて！！皆が食堂に行くのを見ながらいつ終わるか分からないアンタのやり取りをずっと急かしてたわよ!!! お陰で今頃食堂は大混雑、お昼食べれなかつたらどうしてくれるのよっ！」

彼らが通っている大学は他の学校に比べて食堂のメニューが豊富で味が良く、しかもかなり安い。そのためお昼はいつも戦争なのである。しかも運が悪い事に、つい先程彼らが受けていた講義は食堂から結構離れた距離にある教室で行われていた。終わってすぐに早足で向かえば何とか間に合ったかもしれないが、もう既に15分ほど経過している。これでは走ったとしても間に合わないだろう。

そんな事態の元凶である真琴に詰め寄った菜々香は彼を睨みつけるが、当の本人はあまり気にしてない様子だった。

「二度でいいから、食堂のご飯が食べたい……」

さっきのような怒りの表情は消え、懇願するように真琴へ縋り付く菜々香。そんな彼女を尻目に、彼はまたスマホを操作し始めた。

「そんなに行きたいなら僕を置いて行けばいいのに」

「出来たらそうしたい所よ！はあ、アンタの妹達に頼まれなかったら、今頃食堂で美味しい料理を頬張ってるのに……」

「でも菜々香の事だから、そんな事してたら間違いなく太るよね。食堂の料理は確かに美味しいけど、結構カロリー高いし」

「ええそうよ！お陰で高校の時よりも遥かに減量できて感謝してるわよっ!!」

先程収まった筈の怒りが再度頭になり、目まぐるしいほどの喜怒哀楽（今は怒と哀しかない）を見せる菜々香。しばらくあーだこーだ

と文句を垂れていた彼女だったが、スッキリしたのかいつもの調子へと戻って行った。

「で、今日は何処で食べるの？」

「うくん…… コンビニかなあ」

そんな会話をしながら、近くのコンビニがある棟まで歩く二人。そして棟の中へ入ると、そこには彼らと同様食堂に入れなかった者達が外に設置されている複数の丸テーブルを囲んで食事をしていた。

「食べ物私が買ってくるから、真琴は席取ってて」

「はいはい」

真琴は菜々香に言われた通りに空いている席を見つけて陣取ると、再びスマホを取り出して操作を始めた。画面に表示されているのはトークアプリのホーム。そこには彼が今まで登録してきた友達や家族の名前が並んでいた。と言っても、人数はかなり少なく、10人も居ない。そんな貴重な数人の中に、先程まで彼と一緒にいた菜々香の名前もあった。そしてついさっきかた連絡を取り合っていた二人の人物から、それぞれ返信が来ていた。

内容を確認して返事を送ると数10秒後に既読が付き、その数秒後に返信が来た。それに対して何と返そうか考えていると、ふと手元からスマホが消えた。

正確に言うと、取られたのである。

「はい、お待ちせ」

「結構早かったね」

買い物を終えた菜々香が右手に食べ物や飲み物が入った袋を持ち、左手には先程まで真琴が操作していたスマホを持っていた。

袋をテーブルの真ん中に置いた彼女は、空いた手で彼のスマホの

画面を操作し始めた。

「プライバシーの侵害だと思いまーす」

「アンタがああ娘達に変な事言ってるのかチェックしてるのよ」

そう言いながら素早く操作してチェックする菜々香。そして目的の人物とのやり取りを見終えると、そのままスマホを自分のカバンへと仕舞った。

「ちよっ、返してよ」

「食事が終わるまではダメ。少しは私の話し相手になりなさいよ」

「愚痴しか言わないくせに」

そう言いながらも、真琴はしっかりと彼女の話聞いていた。

「はあく、やっと終わったあー！」

午後の授業が終わり、真琴と菜々香は帰路に着いていた。二人共電車通学であるため、今は駅のホームで電車を待っている。

「ねえ真琴、今日はどっち?」

彼女の言う、どっち、と言うのは、彼らが家に帰る途中に顔を出

しに行くバンドグループの事である。実際に彼らがグループに入っている訳ではなく、真琴の妹二人がそれぞれ別のグループに所属しているのだ。

「今日はアフグロだよ」

これは二人の妹を持つ兄の、過保護な日常物語。

第2話

帰りの電車に乗り、大学であれ程いじっていたスマホには手も触れずに揺られること数分。

目的の駅まで来た二人はそのままとある場所へと向った。それはCIRCLEと言うライブハウスである。中にはスタジオがあり、ライブに向けての練習が出来る。

真琴の妹達も、よく此処で練習しているのだ。

店に入り妹達が練習しているスタジオへ向かう。楽器の音が聞こえてこないので恐らく休憩中だろう。ドアを開け、中にいるであろう彼女達に声をかける。

「巴、お疲れ様〜」

「こら真琴、ちゃんと皆を労いなさいよ」

菜々香のツツコミを貰いつつ中を見渡すが、そこには本来5人居るはずの女の子達が3人しか居なかった。

「あ、真琴さんに菜々香さん!」

「おー、琴さんと、菜ー、さんだ〜」

「げ、菜々香さ…「らーんちゃーん!!」…ひっ!」

中に居た3人がそれぞれ反応を見せてくれた。1人目は上原ひまり、ピンクの髪で、女の子としてはかなりの大玉を持っている子。

2人目は青葉モカ、髪が灰色で、ゆったりとした喋り方が特徴である。

3人目は美竹蘭、黒髪に1部赤いメツシユが入っており、かなり気の強い女の子だが今は菜々香に揉みくちやにされている。

「あれ、巴は?」

「つぐの事も聞いてあげようよ琴さん〜。今は2人で飲み物買いに

行ってるよ〜」

「じゃあ2人が戻ってくるまでゆっくりしてようかな」

「丁度休憩に入った所なので大丈夫ですよ!」

そう言うのと、ひまりは近くにあつた椅子を真琴のすぐ側まで持つてきた。

あまり長居するつもりも無いので真琴は遠慮したのだが、ひまりがどうしても言うので座ることにした。

ふと3人居るはずなのに先程から1名声が聞こえないのを不思議に思い、彼女がいる方を見ると何とも歪んだ光景が広がっていた。

「ぐへへ、らんちゃん」

「……………」

そこには丸椅子に座つた蘭と、それを後ろから抱き締めて頬擦りをしている同級生の姿があつた。

いつも気が強く、皆を纏めている女の子が猛獣の餌食となつている。

「菜々香さんって、ホントに蘭のこと好きだよねー」

「だってこんなに可愛いんだよ!?!しかもお人形さんみたいに髪に艶があるし、お肌もスベスベで気持ちいいの!これを抱き締めて頬擦りするなつて言う方が無理だよ!!これでも我慢してるんだよ?」

「真琴、助けて……………」

「ごめん蘭ちゃん。その状態の菜々香を止める手段を僕は持つてない」

いくら同性とは言え年上の人に抱き着かれ、さらにはそこそこ過剰なスキンシップをされている蘭の顔は、恥ずかしさから真っ赤に染まっていた。

真琴は蘭に多少の申し訳なさを感じながら、それを紛らわすように

ひまりと談笑を始めた。

「最近大学はどうですか？彼女出来ました?!」

「ひまりちゃん、会うたびそれ聞いてくるね」

「だって気になるんですもん！真琴さんは知らないかもしれないですけど、うちの学年では結構有名なんですよ?」

「まさかの一年生？悪い気はしないけど、流石に接点が無さすぎる言うか、そもそも母校ですらないし……痛っ」

ひまりに言葉に少々考え込んでいると、謎の衝撃が後頭部を襲った。

感触的に中身の入ったペットボトルだろう。しかも満タンの。痛む後頭部を擦りつつ、犯人がいるであろう後ろを振り返ると……

「よお、兄さん」

「巴、会ってすぐ殴るなんて、いつからそんな暴力的に……痛い！凄く痛い！待って、僕の頭はドラムじゃないよ!!」

「安心しろ、和太鼓のつもりで打ってる」

「全然安心出来ない！ストップ、バストオップ!!」

真琴の必死の叫びにより、巴の演奏が終了した。

彼は先程よりも酷く痛む頭を擦りながら、涙目で巴という少女に向かって抗議を始めた。

「巴、僕が何したって言うんだよ……」

真琴の目の前に立っているのは、宇田川 巴。紅色のロングヘアとスレンダーな体型の持ち主で、真琴の妹である。

巴は座っている真琴の前に立ち、腕を組んで真琴を見下ろしていた。

「なあ兄さん、妹のLONEを無視するなんて酷くないか？折角兄さんに普段じゃ出来ないような相談を持ち掛けたつてのに」

「巴、嘘はいけないよ？僕が最後に見たのは「今日は練習に来ないでくれ」という連絡で、それ以降は着信音が無かったから届いてないし、そもそもそのメッセージを通知で見ただけだから既読は付けてない。だから僕は巴からのメッセージを見ていなかったことになる。兄として妹からの連絡に直ぐ返せなかったのは切腹ものだけど、さっきだけは開いちやいけないような、そんな気がしたんだ。やはり人間というものは罪深い。大事な人よりも、本能を優先してしまうなんて……」

「ならその本能で、ここに来たら後でどうなるのかまでは察せなかったのか？」

「練習中の巴に会いたって欲が抑えきれなかつ……」

真琴の言葉は、再び頭部に向かって振り下ろされたペットボトルにより遮られてしまった。

その後練習を再開するからと部屋を追い出された真琴と菜々香はまだ帰るには早いと感じ、2人でコンビニへと寄ることにした。

「ねえ真琴。何で巴ちゃんに来るなって言われてたの？」

「通して練習するから、セトリがバレるのが嫌なんだって」

「成る程ねえ。あ、そうだ！アフグロのライブっていつ？」

真琴はポケットからスマホを取り出してカレンダーアプリを開く。びっしりと予定が書き込まれている中から、赤く色付けされている部分を見て、今日の日付と照らし合わせた。

「来週の土曜だね」

「え、来週!? えっと、えっーと…… あ、ああああつ!! バ、バイトだあ…… ごめんね、蘭ちゃん」

アフグロのライブとバイトの日が被ってしまった菜々香は、がつくりと頂垂れた。

そんな彼女の肩にポンツと手を置いた真琴は一言。

「ドンマイ」

「もつと早くに教えなさいよこのバカあ!!!」

その直後、菜々香の右ストレートが真琴の頬に直撃していた。

第3話

「まだ痛い……………」

その日の夜、夕飯を食べ終えた真琴は、自室で大学の課題を進めていた。

ただ手を動かしてはいるが、いかんせん菜々香に殴られた頬が痛くて中々集中出来ない様子である。

「これは菜々香に責任をとってもらおうか……………」

そう言いながらスマホを取り出して菜々香の番号を探していると、不意に手元からスマホが消えた。

犯人が誰かを察した真琴は、やれやれといった表情で後ろに体を向けた。

「巴、もうノックをしろとは言わないから、せめて一言欲しい」

「今更だ。それに兄貴だって、よくアタシの部屋に勝手に入ってくるだろ？」

「それは……………着替え中の巴にバツタリっていうのも狙って「よしクソ兄貴、覚悟しろ」……………冗談だって」

拳を構えた巴を宥めつつ、スマホを返してもらおう。

そして妹が部屋にいるのにも関わらずに菜々香に電話を掛けた。聞かれて困るような内容はLONEを使うので、あまり気にしたことはない。

「もしもし菜々香？明日で…………… 出のレポートを見せてくれると嬉しいなって言おうとしただけじゃないか……………」

「また切られたのか？」

真琴が机に突っ伏して項垂れるその横で、いつの間にかベッドに腰掛けていた巴がニヤリとした顔で聞いてくる。

「どうしよう、講義前までに出せって言われてるのに……」

「しよっぱなの授業なのか。そりゃきつそうだ」

「手伝ってくれたりとかは……」

「高校生に大学の宿題を手伝わせるなよ。そもそも、早目に終わらせなかった兄貴が悪い」

そう言いながら、真琴のベッドの上で横になった巴は、真琴の方を向きながらさらにニヤニヤと笑みを浮かべる。

まるで、兄が困っている姿を楽しむように。

真琴が必死に打開策を練っていると、勢いよく部屋の扉が開かれた。

開いたドアから顔を覗かせるのは2人目の妹である、あこ。巴の1つ下で、俺の4つ下、紫色の長めの髪の毛が特徴である。

「お兄ちゃん、お願いがあるの！」

「あこ、お願いだからノックを……いや何でもない。それで、どうしたの？」

「数学の宿題を手伝って欲しいなって！」

そう言いながら、あこは真琴にプリントの束を見せてきた。

ざっと見た感じ20枚ぐらいあるであろうそれと、机の上で開かれたデスクトップPCに映るレポート作成画面を見比べた真琴は、すぐさまPCをスリープモードにした。

「よし、あこの宿題を片付けよう」

「正気か兄貴!?自分のはどうするんだよ!」

「…………… 明日菜々香に土下座する」

「プライドは無いのか!?あこのはアタシが手伝うから、兄貴は自分のやれって!」

己の課題より妹を優先しようとする兄を正気に戻すべく、彼の両肩を掴み遠慮なく揺らしながら説得をする巴。

真琴はそんな巴の手に優しく自分の手を重ねると、穏やかな表情でこう言った。

「僕は妹が笑顔でいてくれるなら、何を犠牲にしたっていい。そう思ってる。それに、可愛い妹のために身を削るのは兄の役目さ」

「この兄貴、もう駄目だ……………」

駄目兄の説得に失敗した巴は、その場に膝から崩れ落ちてしまった。

真琴があこの手伝いに行った数分後、自室に戻っていた巴は、ベツトに寝転びながらある人物と電話をしていた。

「度々すみません、兄貴のせいで負担を掛けてしまって……………はい、本当にすみません、宜しく願います。では、失礼します」

電話を終えた巴は、今から迷惑を掛けてしまう先輩と、その先輩の行動源ともなっている幼馴染みに申し訳ない気持ちでいっぱいとなった。

次の日、ある大学で1人の女子学生に奴隷の様に扱われる1人の男子学生が目撃され、その数時間後には、ある喫茶店で何者かに揉みくちゃにされてグツタリとした様子の女子高生が目撃された。

お・ま・け

く某日、とある大学く

「真琴、私お腹すいたんだけど」

「お言葉ですが菜々香様、貴方様は既に朝食をお召し上がりになっておられます。これ以上の余分なカロリー摂取は無駄なお肉を…………… ああー！菜々香様、お待ち下さい！その手に持ったレポートを破り捨てようとししないでください！」

「ねえ真琴。これ、私が徹夜で作ったのよ？アンタの癖を考えながら手直しするの大変だったんだからね？アンタがそんなひねくれた事言うんだったら、ホントに破り捨ててもいいんだけど？」

「申し訳ございませぬ菜々香様！このワタクシ、既に身も…………… 心も…………… うっ…………… 貴方様に…………… ぐう…………… ！」

「そこは無理しなくていいわよ！てか、身も心もって気持ち悪いんだけど…………… とにかく、これから一週間は私の言う事を素直に聞く。いいわね？」

「くっ！なんて可愛げのない女…………… ああー！菜々香様っ！申し訳ございませぬでしたあ!!!」

お・ま・け・2

〜某日、とある喫茶店〜

「ねえ蘭ちゃん聞いてよ、真琴の奴がホントにどうしようもなくてさあ……………」

「……………」

「巴ちゃんやあこちゃんに甘すぎるといふか、自分の欲望に正直すぎるというか」

「……………」

「ねえ、蘭ちゃんも何か喋ってよ。私とお話しよー？あ、もしかして私の膝の上は緊張するとか？もうっ！可愛いなあー!!」

「……………（誰の差し金かは分からないけど、真琴の奴、今度会ったらとにかくぶっ殺す!）」

第4話

「もう、腕が疲れた……………」

「早いよ真琴。まだ5科目分あるんだからね？早く写さないと試験に間に合わないよ？」

今日は日曜日。普通の学生ならば、次週から始まる地獄の一週間（学校生活）に耐え抜くための英気を養っているころだろう。

だが、いまここにいる男。

、宇田川 真琴、は違った。彼には、普段から大学の講義を全く聞いている事によるツケが今来ているのである。

「写真撮って後で写すじゃダメ？」

「駄目に決まってるでしょ。アンタそう言っただけで写してきたこと一度も無いじゃない。それに、私のアパートに勝手に押しかけてきて、今日は全部写すまで帰らないとか言っただけなのはどこの誰よ」

呆れた顔で真琴を見る菜々花。だが当の本人はやる気が無いのか、先程から机に突っ伏している。

「巴かあこが居てくれたら頑張れるんだけどなあ……………」

「むっ…………… 何よ。私じゃ頑張れないわけ？」

真琴の言葉に不服そうな反応を見せる菜々花。そんな彼女の顔をちらりと見た真琴は、菜々花にある問いかけをした。

「じゃあもし菜々花が今の僕と同じ状況に立たされてるとして、僕か蘭ちゃんに応援されるんだったら「蘭ちゃん…………… ちよつと傷つい

た、ごめん」

「分かればいいのよ」

「でもなあ……流石にもう飽きちゃった」

「見せてもらってる身分で何言ってるわけ？てか、アンタの作業が終わらないと私がテスト勉強できないんだけど」

机から離れ、ひと眠りしようとしてベッドへ向かった真琴の首根っこを掴み、そのまま元の位置に戻す菜々花。

このままでは埒が明かれないと思った彼女は、少しの間買い出しに行くこと真琴へ伝えて部屋を出ると、スマホを取り出してある人物へと連絡を取り始めた。

「すう……すう……。。。」

「全くこいつは…」

「お兄ちゃんぐっすりだね」

「寝てる真琴さん見るの初めてかも」

菜々花が家を出てから数十分後。近くのコンビニで買い物済ませた後、先程の電話で呼んでおいた二人と合流し、連れてきたのだ。

一人は真琴の妹である、宇田川 あこ。もう一人は、今井 リサ、である。彼女たちの共通点は Rose lia というバンドグループである。この前のアフグロ同様、真琴達はよく差し入れをしたりするので、仲はかなり良い方だ。

ではなぜ、菜々花が彼女たちを連れてきたかと言うと…。

「菜々ちゃんホント今日呼んでくれてありがと！これで次のテストも何とかかなりそうだよ！」

「菜々お姉ちゃんありがとう！」

2人はキラキラとした目で菜々香を見つめている。それもそのはず、リサは平均並みの点数を取れるものの、ここ最近はベースの練習に明け暮れていたため、試験勉強が疎かになっており、あこにいたっては論外である。

そんな2人に勉強を教えるべく、菜々花は2人を招いた。

「早速始めたいんだけど、その前に真琴、起こしてくれる？こうなったら中々起きなくて…」

「あつ！じゃあアタシが起こ」お兄ちゃん起つきろー!!」ちよ、あこっ!？」

リサが笑顔で真琴を起こそうとベッドへ近づいた瞬間に、あこが勢いよく横を通り抜け、そのまま寝ている真琴へダイブした。

菜々花とリサは真琴の身を案じたが、2人ともすぐにその表情が無へと変わった。

なぜなら……………。

「あはははっ！お兄ちゃんくすぐったいよ〜！」

「あこ、また少し成長したな。兄は嬉しあだっ！」

実は起きていた真琴。そして兄としての特権を用いてあこの体を触る真琴の頭に、リサの鉄拳が落ちた。

「真琴、さっさと起きて」

「あ… リサちゃん、僕まだ眠いから寝たいな〜、なんて……………」

「早く」

「はい」

真琴が起きてから数分後、彼ら4人は勉強会を始めていた。

「お兄ちゃんこの問題分かんない！」

「えつとね〜」

「アンタは先にノートを写しなさい」

「真琴、早く終わらせてよー」

こんなやり取りをしながら、数時間後には真琴はしつかりとノートを写し終え、その後は菜々花とともにリサとあこに勉強を教えた。

一段落着いた時には、辺りはもう暗くなっていた。

「はあく疲れた〜!!」

「もう勉強はやだよ〜..」

「2人ともお疲れ様」

「臨時報酬欲しい..」

両腕を上げて大きく伸びをするリサ。兄の膝の上に頭を乗せて寝転がるあこ。笑顔で2人を労う菜々花。ぐったりとした様子で、ひざ元にいるあこの頭をなでる真琴。

菜々花を除いて皆が疲れ切った様子である。

「菜々ちゃん、あんまり疲れてなさそうだね…。」

「何でか知らないけど、菜々花は体力だけはあるからね。その代わり足りない部分が色々… あっ」

言ってから気づいたのか、真琴の顔が急に青くなる。

傍にいたはずのあこはいつの間にか真琴から距離を取っており、リサは苦笑いしていた。

「真琴、疲れて頭回って無いのかな？余計な事までいつちやったね… 覚悟、出来てる？」

年相応の胸囲を持っていない菜々花は、真琴の一言で冷たい笑みを浮かべていた。

「くっそく… 菜々花のやつ、あんなに怒んなくても…」

「あれは真琴が悪いよ。菜々ちゃんの気にしてること言っちゃうんだもん」

「だって事実だし…」

外がすっかり暗くなっているため、リサを家まで送り届けること（リサに半ば強制的）にした真琴は、彼女の家までの道のりを一緒に歩いていた。

「そういう事言わない。あ、そうだ！夏にライブがあるんだけど、真琴も一緒に来てよー」

「一緒に？まあ、あこがいるから勿論行くよ」

「そうじゃなくって… いや、それもあるんだけど…」

リサにしては珍しく、少しためらっていた。

「その… 場所が少し遠いから、送迎をお願いしたいなーって！真琴、免許持つてるでしょ？」

「持つてはいるし、送迎も別にいいけど、楽器はどうするの？流石に全員分入らないけど…」

「あっ…」

「しょうがない、菜々花に頼んでみるよ…」

こうして、一足早い夏の予定が組みあがったのだった。

第5話

真琴、菜々香、リサ、あこの4人での勉強会から数週間後。

Roseliaのメンバーを送迎すべく、真琴は朝から1人ずつ家を回っていた。

「全員揃ったかな？忘れ物とか無ければ出発しちゃうけど」

「オツケーだよ！」

楽器は真琴が前日に運営へと預けている。宿泊荷物も前日にメンバー間でやり取りをしており心配はないので、Roseliaのメンバーを代表してリサが真琴に言葉を返した。

真琴は念のため他のメンバーに目配せして確認を取り、車を発進させた。

1時間後、サービスエリアへと到着した一行は遅めの朝食を取り、その後は昼食の買い出しをしていた。

「真琴さん……その……本当に……いいんですか？お金を……出してもらって」

レジで全員分の金額が表示され、それを見て顔を青くしている、白金 燐子、と、氷川 紗夜。

その2人の合計金額は1000円未満だが、他の3人は1人1000円を超えていた。

計5000円程である。

「そ、そうですよ！ただでさえ送迎をしてもらっているのに、朝食だけでなく昼食まで奢ってもらうなんて……」

朝食の時点でだいぶ抵抗していた紗夜は、これ以上真琴に負担をかけまいと自分で払おうとしたのだが・・・

「いいっていいって、まだ夏のイベントはいっぱいあるんだし、その時のために取っときなよ。それに、偶には年上らしくしたいしね」

「で、ですが！真琴さんにはいつも・・・」

「紗夜、真琴もそう言ってるのだから、甘えるべきよ」

「湊さん達は少し自重して下さいー！」

ここだけの話、友希那だけは昼食の他、のど飴や日焼け止め、音楽雑誌等を購入させていた。

その後は止むことのないガールズトーク（主にリサとあこ）をBG Mに、再び目的地へと向かった。

そこから更に1時間後。

「とうちゃーく!!」

「結構・・・暑い・・・ですね」

「宇田川さんに今井さん、周りの目もあるんですから、あまりハメを外さないで下さい。白金さん、水分と塩分の補給、忘れないでくださいね」

「・・・・・・・・」

目的地というのは有名な海水浴場である。そこでは今日の夕方にイベントがあり、彼女達はそこでライブをする事になっている。

到着したのはお昼頃でまさにピークだ。そこらじゅうに子連れの家族やカップル、目に毒なナイスバディを持つ学生やお姉さん達が出た。

楽しそうな場の雰囲気には釣られてかりサとあこは大はしやぎ。隣子は日ごろ外に出ないせいかな暑さに苦しんでいた。そしてそんな彼女らに気を掛ける紗夜。その中でただ一人、友希那だけは一人静かにイヤホンを装着して何かを聴いていた。

「さて、ライブまでには結構時間があるけど、皆はどうする？僕は先にホテルに荷物を置いてきちやうけど」

「私たちは預けた楽器の確認を先に行います。その後の事は湊さんにお任せしますので」

「分かった。なるべく早く戻ってくるけど、何かあったらすぐに連絡してね。あと、絶対に全員で行動を共にすること。いくら人目があるとはいえ、何かがあるか分からないからね」

真琴の言葉に全員が頷くと、リサとあこを筆頭にビーチを進んでいく。それを見送った真琴は車へと戻り、予約してあるホテルへと向かった。

「こちらが各部屋のルームキーと朝食券でございます。無くさないよう気を付けてください。では、担当の物が荷物をお運びしますので、少々お待ちください」

チェックインを済ませると、自分たちの荷物を載せたカートを別のスタッフさんが真琴を先導するように運んでいく。

近くのエレベーターの傍まで来るとスタッフさんがボタンを押し、

上の階で止まっていたエレベーターが動き出した。

「チン」という音がした後にドアがゆっくりと開き、スタッフさんと一緒に中へ入る。

目的の階に着くと、二人でそれぞれの部屋に荷物を置いた。

二人部屋を3つ用意しているので、友希那とリサ、紗夜と隣子、真琴とあこ、の組み合わせで部屋に荷物を置いていく。

「では、私はこれで失礼します」

「わざわざありがとうございます」

全ての荷物を置いた後、自分の支度をするために一度部屋へと入った。

必要な小物を全てポーチに入れて準備が完了したので部屋から出ようとドアの方へ向かうと、突然ドアがノックされた。

スタッフが来たのかと思った真琴は、ドアに付いているのぞき穴から確認することなく開けてしまった。

「はい・・・」

「やっほ」ボタンツ！

「おかしいな、何で菜々花が・・・幻覚かな」

慣れない長距離の運転で疲れているのかもしれない。意を決してもう一度ドアを開ける。

「次閉めたらクロス」

「・・・どうぞ」

ドアを開けた瞬間とてつもない殺気を当てられ、自然と悪魔を部屋に入れていた。

中に入った菜々花はそのままベッドの方に向かうと、おもむろにベッドへと倒れ込んだ。

そしてふかふかな感触を確かめるように手足を動かすと、何とも気の抜けた表情を浮かべた。

「メイクしたてのベッドはやっぱり気持ちいい」

「まだ堪能してないのに・・・てか菜々花、何でここに居るの?」

「そりゃあ私達もここのホテル取ったからよ」

「てことは、巴達もここのホテルなんだね」

本来真琴は菜々花に楽器の運搬を頼む予定だったのだが、あこ達と約束をした後に巴から同じイベントの送迎を頼まれてしまったため、菜々花に代役を頼んだのだ。

ちなみに菜々花も真琴同様、前日に機材を運んでいる。

「じゃあ真琴、そろそろ行こっか。水着姿の蘭ちゃんに早く会いたいし・・・グヘヘ」

「菜々花、車の中で蘭ちゃんに変なことしてないよね?」

「・・・よーし行こう!」

第6話

ビーチに戻ってきた真琴と菜々花は一旦別れ、それぞれ巴やあこ達の元へと向かった。

「結構日差しが強い・・・巴とあこはちゃんと日焼け止め塗ったのかな？」

最愛の妹sを心配しながら辺りを見回すも、流石にこの人の多さでは中々困難である。

炎天下の中をしばらく歩くと、人集りを発見した。それもそこそこの規模である。

「うくん、お昼にイベントなんてあったかな？ライブは夕方のはずだし・・・」

何が行われているかは知らないが、あれだけ集まっていれば妹達もいるかもしれないと考えた真琴は、その集団の方へと歩みを進めた。

人混みに近づくにつれて、そこから発せられる熱気にむせ返りそうになりながらも何とか中が見える位置に辿り着いた。

「うわ、早速やってるよ・・・」

何とそこでは、巴達とあこ達によるビーチバレー対決が行われているのである。

人数は4 vs 4。擬似的に作られた（棒か何かで線が引いてある）コートの中で試合を行っており、コートの外では燐子とモカが二人揃って体育座りをしていた。

試合はかなり白熱しており、何度もコートを行き来するボールと、上下する胸に視線を奪われる程だった。

メンバーの殆どは水着を着用しているのだが、紗夜だけは何故か私

服のままだった。

「紗夜ちゃん動きにくそうだな〜．．．あつ、転んだ」

真琴の予感が的中したのか、ボールを取ろうと動いた彼女の足がもつれ、受け身を取れずに顔面から砂浜へとダイブした。

「これは、滅多に見れない紗夜ちゃんだ．．．ププツ」

いつもの彼女からは想像出来ない行為を見た真琴は、こらえ切れずに吹き出してしまった。

それが聞こえたのかは分からないが、笑いが収まった時には倒れ込んでいた筈の彼女は既に立ち上がっており、何故か真琴の方を向いていた。

（えっ、気づかれた？ いやいや、こんなに大勢人が居るんだからそんな事はない．．．と思う．．．．だから紗夜ちゃんがあんなに怖い顔して僕の方へ歩いてくるはずが）

「真琴さん、今から水着に着替えてくるので少しの間試合に出て下さい。それで先程私を笑った事には目を瞑りますので」

「は〜．．．」

「疲れた」

「流石に砂浜でスポーツはきついよなあ」

「体を動かすのも悪くないですね」

「またやりましょうよ！」

ビーチバレーも一段落し、今は事前に用意してあったパラソルに体を隠して各々休憩を取っている。

飲み物を飲む者、談話をする者、日焼け止めを塗直す者、寝っ転がる者、様々である。

「ところで、菜々花は何処にいたの？」

てつきり審判でもしてるのかと最初は思っていた真琴だったが、試合中に彼女の姿を見ることは無かった。

試合が終わってからいつの間にか一緒に居たのである。

「何って、勿論蘭ちゃんの水着姿をカメラに収めてたのよ。はあく…：かわいいなあ」

菜々花が手にしているカメラの画面には蘭の水着姿がドアップで映し出されていた。もうここまで来ると変態の域なのでは？と思っただ真琴だが、自分も巴やあこの写真を撮りまくっていたので何も言わないことにした。

「それ、蘭ちゃんに見つかからないようにね」

撮った写真を見てだらしない顔をしている菜々花に一声かけ、その

場を離れて巴達の方へと向かう。

「皆、そろそろ時間だよ」

「もうそんな時間か。サンキュー兄貴」

「ところで、皆水着で出るの?」

先程から着替える素振りを見せないメンバーに思った事を聞いてみる。ただ折角ビーチで演奏出来るのだから、この姿でいたいのだろうか。

「流石に上着は羽織る。夕方でちよつと寒いし、菜々花さんや知らない人にマジマジと見られるのも気分が悪い」

「菜々花が聞いたら泣きそうな言葉だね」

今回の旅で彼女に対してかなりストレスが溜まっているのか、蘭の口調はかなりトゲトゲしかった。

しかし蘭自体は彼女の事を嫌ってはおらず、どちらかと言うと妹離れが出来てない姉、という認識である。

巴達は大丈夫そうなので、真琴はあこ達の元へと向かった。

「皆準備は……大丈夫そうだね」

パツと見準備完了の状態で、各々集中力を高めている彼女達を見て感心する真琴。

流石はプロ意識の高いバンドである。

「あ、お兄ちゃん!上着貸して!」

「あれ？あこは自分の持ってなかったっけ？」

「うー、さつき濡らしちゃって、まだ乾いてないだよ・・・」

「あく、僕は別に構わないけどちよつとサイズが合わないかなあ。巴ならまだしも、あことなると・・・そうだっ！おーい、菜々花！」

袖がブカブカだとドラムが叩きにくいとだろうと思つた真琴は菜々花へと声をかける。菜々花のやつもあこよりは大きいサイズだが、まだ許容範囲だろう。

蘭の写真を堪能していた菜々花は真琴の言葉に気付くと「なに？」という表情を浮かべた。真琴は彼女の近くまで寄ると、彼女の着ている上着を指さしてこう言った。

「脱いで」

「死ね変態」

「ごめん、言葉が足りなかった。菜々花の水着には微塵も興味無いけど、あこに上着を貸して欲しいから上着脱いで」

「・・・・・・・・・・」

実は水着を着ていた菜々花。そんな彼女は額に青筋を浮かべながら笑顔で立ち上がり、そのまま真琴の股間を蹴り飛ばした。

痛みに必死に耐える真琴には目もくれずにあこの元へと向かい、自分の上着を脱いで彼女へと渡した。

「ありがとう、菜々花お姉ちゃん！」

「いいっていいって。ライブ、頑張つてね」

「うん！」

イベント開催時刻となり、設置されたステージの上で司会者が挨拶をしている。

巴やあこ達はすでに裏で待機しており、真琴と菜々花はそれぞれ飲み物片手に演奏が始まるのを待っていた。

「ねえ菜々花、ちよつと寒い」

「少しは我慢しなさいよ。私の上着をあこちゃんに貸してるんだから、私の分はアンタが補いなさい。それに、どうせすぐに暑くなるでしょ」

「見られる部分無いくせに・・・」

「なに？また蹴りたいの？」

菜々花のヤル気満々の目に萎縮した真琴は、一言「ごめんなさい」と言い、ライブが始まるまで大人しくしていた。

ライブが始まってからはあつという間で、午前午後とはしやいでいたはずの観客は熱気を取り戻し、真琴達も運転の疲れを忘れる程に盛り上がったのだった。

第7話

暑苦しい夏は去り、その余韻を残しながらも比較的過ごしやすい秋がやってきた。秋と言えば読書、味覚、スポーツ等と言われているが、ここ宇田川家ではいつもと変わらぬ生活を送っていた。ただ一人末っ子

あこを除いて。

「ただいまあ・・・」

いつもなら元気よく、それもそこらの男子とは比べ物にならないあこののだが、今日だけはやけに覇気が無かった。

「おかえり。かなり疲れてるみたいだけど、何かあったの？」

いつもの様にあこの気配を感じた真琴は、電話の最中だということにあこを出迎えていた。手に持つスマホからは、電話相手である菜々花の声が聞こえるのだが、今はそんなことよりもあこの状態が心配であった。

「うう、体育祭の練習があ・・・」

どうやら、秋の一大イベントでもある体育祭が近いようだ。そのせいで練習はハードになり、それに加えてバンド練習は通常通り行っている。流石のあこでもかなりくたくたなようだ。

「お疲れ様。お風呂沸かしてくるから、荷物を部屋に置いてきな」

「うん・・・」

真琴の言葉に少し頷いたあこは、重い足取りで二階へと上がっていった。その後ろ姿を見た真琴は通話が切れているスマホを操作し、

先程会話をしていた人物に電話を掛けた。

「はあくすつきりしたく・・・」

お風呂から上がったあこは、タオルを首に巻いたままりビングへと入ってきた。そしてそのままソファへと倒れこむ。お風呂に入つて気分的にはすつきりしたもの、体の方の疲れは残っているらしい。このまま寝てしまうと姉に怒られてしまうため、あこは体を起こして何とか睡魔に耐える。

「ずいぶん眠そうだね、あこちゃん」

「ん、んく・・・その声、菜々花お姉ちゃん？あれ？何でここに・・・」

眠りにつく直前に起こされたあこは、寝ぼけた目で声のした上の方へと顔を向けた。そこにはここにいるはずのない菜々花が、ソファに両腕を横にして乗せ、重ねた手にあごを乗せた状態であこを見ていた。

「真琴からあこちゃんが疲れてるって聞いてね、マッサージでもしてあげようかなくって」

「え．．．．．」

「ねえあこちゃん、何でそんな引き気味なの？」

「んにゅ．．．だって菜々花お姉ちゃんは．．．特殊な性癖だってお兄ちゃんが．．．スウ」

　凄まじい爆弾発言をしたあこは、睡魔に耐え切れずにそのまま眠ってしまった。一人残された菜々花はあこに向けた笑顔を引きつらせながら、ソファを離れ、ある人物の部屋に向かった。

「真琴お!!アンタあこちゃんに何吹き込んでんのよ!!!」

「えっ!?何のこと?！」

「とぼけんじやないわよ!さつきあこちゃんから聞いたんだからね!!
何よ特殊な性癖って!!!」

「あ．．．．．」

「おもつきし心辺りあんじやない!いいわ、あこちゃんのマッサージの前にアンタを治療してあげる．．．」

「菜々花お姉ちゃんありがと。何だか凄く体が軽いよ！」

「どういたしまして。やっぱり娘って柔らかくて気持ちいいわ〜」
「えっ……」

あこの自室のベッドでマッサージをしていた菜々花は、あこの体を堪能したのかツヤツヤとした表情であった。

「なあ兄さん、前から言ってるけど、いい加減余計な事言わない方がいいんじゃないか？」

「いつつ……それは分かっているんだけど、つい出ちゃうんだって」

「兄さんはそれ程、菜々花さんのことを見てるってことだよ」

菜々花の折檻が終わったのち、頃合いを見計らって真琴の様子を見に来た巴。折檻のダメージがまだ残る真琴に肩を片してベッドへ寝かせると、長女として説教を始めたのだ。

「見てるも何も、他に女子と会わないだけだっ……」

「でも、蘭たちや湊さんたちとはよく会ってるよな？」

「それは確かにそうだけど・・・あの子たちは妹みたいな感じで・・・あ、いや勿論一番は巴とあこだけど、何ていうか、恋愛対象かって言われると」

「じゃあ菜々花さんは恋愛対象だっということか」

真琴の言葉にニヤニヤとした表情を浮かべる巴。対する真琴は深くため息をし、そのまま枕に顔を埋めた。

「おやすみ」

「あー・・・悪かったよ兄さん。だからそんな拗ねないでくれ」
「拗ねてない」

顔を上げない真琴に対し、巴は少し言いすぎたかなと思いつつ「おやすみ兄さん」と言って部屋を出て行った。

その日以降、あこが体育祭の練習で疲れて帰ってくるたびに菜々花がマツサーズをし、何とか怪我もなく乗り越えることが出来た。だが、それは菜々花のサポートのお陰だけではなく、裏では真琴も手をまわしていたのだ。

巴が部屋から出た後、真琴はある人物に電話をかけていた。

『もしもしリサちゃん？』

『どうしたの真琴さん？電話してくるなんて珍しいじゃん』

『実はさ、リサちゃんと同じ学校だから知ってるかもしれないけど、あこが最近疲れ気味なんだよね』

『あー、確かにそうかも shouldn't。アタシらは男女で別々の種目やるけど、あこたちは共通だからねえ』

『そこでさ、もしあこが大変そうだったら、色々手伝ってあげて』

『え？そんなこと？真琴さんの事だから、あこを休ませてくれて言うのかと思つたよ』

『流石にそんな事言わないよ。あこは体育祭を楽しみにしてるし、バンドだって自分でやりたいって言って入ったんだ。僕ができるのは応援だけだよ』

『真琴さんってホント優しいよね。あこや巴が羨ましいな』

『まあもしあこが倒れちゃったら、僕は学校の講義全部休んで看病するつもりだよ』

『ねえ真琴、留年とかホントやめてよ？アタシ真琴さんと同級生とか恥ずかしいから。それに、何より菜々花さん可愛そうだし』

『僕の心配じゃないんだね・・・てか、流石の僕でも2回はないって！』

『冗談だつて。あこのことは任せて。それじゃおやすみ！』

第8話

「はあ……」

ここは大学の講義室。中では哲学の講義が行われているが、殆どの学生は内職をしたり睡眠を取ったりと自由であった。

そんな中、真琴は机に突っ伏してため息をついている。

彼にしては珍しく、かなり落ち込んでいる様子だ。しかも朝からずっとである。

「ため息ムカつくから寝てなさい。アンタどうせ講義聞いてないんだし」

「辛辣過ぎない?」

そんな彼の隣に座る菜々花は、今日は少々ご立腹である。

「菜々花にしては珍しいね。僕の事以外でイライラしてるなんて」

「自覚があるなら少しは気を付けなさいよ。アンタこそ、いつものマイペースはどうしたの」

「実は……巴と喧嘩しちゃったんだよ」

「はあ?!」

あのシスコンである真琴が妹と喧嘩することなんて無いと思っていた菜々花は、素っ頓狂な声を上げてしまう。そのせいで教授に注意され、「すみません」と謝罪をしてから真琴から事情を聞き始めた。

「喧嘩っていうか、悪いのは全面的に僕なんだよね。でも、普段の巴ならあそこまで怒ることは無いはずなんだけど……約束を、すっぽかしちゃって……」

「そりゃ怒るわよー!」

「で、でも!普段は『いつも兄さんには世話になってるから』とか、『次

は気を付けろよ』とか言ってくれてたのに……」

「で、今回は何て?」

『兄貴のバカっ!』って……うぐっ……ぐす」

講義中だというのに泣き崩れる真琴。どうやら先日の巴の言葉は相当突き刺さったらしい。さらに詳しく話を聞いた所、それ以降いくら呼んでも無視され、目すら合わしてくれないという。

「でも、あこちゃんならまだ分かるけど、巴ちゃんがそこまでの反応をするって確かに変ね」

「でしょ?だから困ってるんだよ……」

「ねえ真琴。一つ気になったんだけど、アンタ最後に巴ちゃんと一緒に出掛けたのっていつ?」

「え、巴やあこが出掛ける時は僕も付いてくよ?ほら、この前の浜辺のライブだったり、学園祭だったり……」

一つ一つ思い出すように言葉を並べる真琴。だが菜々花は「そうじゃなくて」と言って遮った。

「巴ちゃんと二人つきりで出掛けたかって事よ」

「え……あっ」

菜々花の言葉にハツとした真琴は、再び思い出すように考え始めた。そして数秒後、おずおず口を開いた。

「多分、入学祝いでご飯に連れてったのが最後……かも」

「多分それ。最近構ってもらえなくて、ストレスが溜まってたんでしょ。ほら、あこちゃんをよくアンタにオネダリするでしょ?でも巴ちゃんはしない。何故ならあこちゃんの姉である手前、あんまり自分が甘える姿を見せたくないんでしょうね」

「……………」

「アンタの考えてる事、当ててあげようか？」

机に突っ伏したままの真琴に問いかける菜々花。真琴はというと、それに対して力なく首を横に振った。

「その様子じゃ、大体合ってそうね。で、これからどうすんの？」

再びの質問に、真琴は上体をゆっくりと起こした。

「今の巴は、話を聞いてくれない」

「うん」

「怒ってる理由を言っても、巴はプライドが高いから、多分もつと怒らせちゃうかもしれない」

「うん」

真琴は「だから・・・」と言うと、意を決したように言葉を続けた。

「菜々花に、協力して欲しい」

「はあ・・・」

ここは宇田川家にある巴の部屋。その中では部屋主である彼女が、ベッドにうつ伏せの状態のため息をついていた。服装は制服のまま、学校から帰ってきたばかりである。

「兄さんに悪い事しちゃったな。いや、でも約束をすつぽかしたのは兄さんで、そもそも！兄さんがもっとアタシに構ってくれれば・・・いやいや、それはワガママがすぎるか・・・」

「いいんじゃない？ワガママでも」
「え？うひゃあ！」

巴が声のした方へ向くと、そこには何故か菜々花がいた。

「な、菜々花さん!?!いつからそこに・・・」

驚きのあまり、バランスを崩してベッドから転げ落ちてしまった。痛む頭を擦りながら立ち上がる巴だが、先程までの独り言のせいでもかなり動揺している。そんな彼女を宥めるように、菜々花は巴をベッドへ腰掛けさせると、自分も隣へと座った。

「その、どの辺りから聞いてたんですか？」

「もっとアタシにくっつてところかな？驚かせちゃってごめんね。ノックはしたんだけど、返事が無かったから」

「あ、いえ。こちらこそすみません。それにしても、どうして菜々花さ

んが？」

巴は今一番気になっていることを菜々花に質問した。それもその筈、今日菜々花が来ることは知らされていない。さらに真琴はこの時間はバイトへ行っているのだ。

「巴ちゃんと話したい事があったんだ」

「兄さんの・・・事ですか？」

「違うよ？」

「え？」

予想外の返しに固まってしまう巴。彼女の驚きの顔を見た菜々花は、その表情の面白さにこらえ切れず、吹き出してしまった。

「あつはっはっは！私はそこまでお人好しじゃないって。真琴と巴ちゃん、喧嘩してるんでしょ？」

「喧嘩というか、私が一方的に怒ってるだけで・・・」

「ま、それはいいとして、私がお話したいのはあこちゃんのこと」

「え、あこですか？」

突然妹の名前を出されて戸惑う巴。あこが何かしたのかと不安になる彼女だったが、菜々花の表情からそれは無いだろうと悟った。

「あこちゃんって、ホントに可愛いよね」

「は、はい。そりゃあ自慢の妹ですから」

「うんうん。あこちゃんの無邪気さはあの位の年代じゃ中々見れないよ。それに、肌のモチモチ感なんてもしかしたら蘭ちゃんより上かもしれないし」

「は、はい・・・」

「この前あこちゃんにマッサージしてあげただけだね、触り心地がもう最高なの！」

菜々花のあこ語りを聞いているうちに、巴は段々顔が引きつっていき、さらには身の危険を感じたのか彼女から少しずつ距離を取り始めていた。

「末っ子っていいよね」

「っ！」

「お父さんやお母さん、兄、姉、色んな人に甘えられる」

「……………」

菜々花の言葉に、巴の表情は段々と曇っていった。

「真ん中の子は辛いよね。甘えたいけど、下の子に弱い所は見せたくない」

「な……さ……に……が……」

「でも、もっと甘えていいと思うよ」

「何が分かるんですか！兄弟のいない菜々花さんに！アタシだって、兄さんにもっと甘えたい！構ってもらいたい！でも、それはあこの役目だから、アタシは我慢しなくちゃいけない……でも！最近になって、また兄さんと一緒にいたいって思うようになって……………！」

菜々花の言葉を聞いていただけの巴が、我慢出来ないといった様子で彼女に自分が思ってる事の全てをぶちまけた。言い終えた巴の目からは、一筋の涙が零れていた。

「分からないよ、私には」

「そ、そんなの無責任ですよ！」

「そうかな？巴ちゃんには甘えられるお兄さんがいるじゃない。たと

え甘えてる所をあこちゃんが見ても、巴ちゃんが思ってるようなことにはならないと思う。だって、二人のお兄さんでしょ？それにね、昔友達がこんな相談をしてきたの。『僕の妹はすっかりし過ぎてる。兄として嬉しいけど、まだワガママを言って欲しいし甘えて欲しい。兄離れをするには早すぎる』ってね。正直その時は『知るか！』って思ってたけど、最近の巴ちゃんを見ると私もそう思う。多分、周りから『すっかりしてるね』とか、『まだ小さいのに偉いね』とか言われてきたんだと思う」

「そ、そんな、こと・・・」

菜々花は俯いてしまった巴の側により、その頭を軽く撫で一言。

「兄に甘えるのは、妹の特権だぞ」

　　3週間後　　大学内のコンビニにて

「ねえ菜々花」

「ん？」

「最近手持ちの減りが早い気がするんだけど・・・」
「気のせいだから、早くご飯買ってきなさい。講義が長引いたせいで
時間無いんだから」

第9話

冬休み前最後の講義を終えた真琴と菜々花は、2人で商店街へと来ていた。両者ともに厚手の手袋とマフラー、コートといった必須アイテムを身に着ており、厳しい寒さに耐えていた。

「真琴、カイロ」

真琴の隣を歩く菜々花は、寒さに手をこすり合わせながらカイロを要求する。

「今日だけで3つも使ってるからダメ」

「ちえー」

カイロを得られなかった彼女は、コートの両ポケットに入っている使用済みカイロを握りしめ、かすかな温もりで我慢することにした。その後しばらく歩いた2人は、行きつけのスーパーへと入っていった。

「じゃあ僕は材料を探すから、菜々花は飲み物をお願い」

「おっけー」

二手に分かれ、それぞれ担当の物を集めてからレジで合流した。

「ねえ菜々花、何でそっちの籠にお菓子が入ってるの？」

「いいじゃない、人数多いんだし。それに割り勘するんだから」

「まあ、残ったらどうせ菜々花が食べるし・・・いてっ」

「余計な事言わなくていいから」

ひとまず真琴が全額支払い、後で菜々花から半額貰うことで話が落ち着き、そのまま2人は帰路に着くことにした。その道中、人の良い

八百屋や精肉店などの店長から声を掛けられて買いそうになる真琴を菜々花が引きずり、洋服やアクセシヨップに目が留まる菜々花を真琴が引きずったりと、そんなやり取りが行われていた。

「おじやましまーす」

「ただいまー」

玄関ドアの鍵を開け、少し大きめな声で帰宅を知らせる。すると、二階の方からドタドタと足音が聞こえてきた。

「お兄ちゃんおかえり！あつ、菜々花お姉ちゃんもいる!!」

「あこちゃんこんばんわ。遊びに来たよー」

最初は真琴の方へと駆け寄っていたあこだったが、菜々花を見つけた途端に軌道修正して彼女へ抱き着いた。よしよしとあこの頭を撫でた菜々花は、買い物袋を持ってあこと共にリビングへと向かっていった。

「あこを・・・菜々花に・・・」

「そんなに落ち込むなよ兄さん」

遅れて降りてきた巴が落ち込む真琴の頭をなで、何とか持ちこたえさせていた。

「はあ、やっぱおこたはいいわね」

リビングでは真琴、菜々花、巴、あこの4人がこたつで暖を取って

いた。

「菜々花お姉ちゃんは持ってないの？」

「実家にはあるんだけどね〜」

「それにしても、菜々花さんってそんなに緩い雰囲気でしたっけ？」

「菜々花は寒いのが苦手なんだよ」

そう言いながら真琴が菜々花側の毛布を上を持ち上げると、すぐさま彼女に手をはたかれた。その手を摩りながら、巴とあこに「ほらね？」という表情をすると、2人は苦笑いで返した。

「ねえ、あこちゃん」

「どうしたんですか？」

先程までこたつでリラックスしていた菜々花が急に意識を覚醒させ、あこを呼びつけた。何事かとあこが彼女の方を向くと、何やら膝元をパンパンと叩いた後に、両手をあこの方に広げてきた。

「いいですよー！」

何のことが察したあこは、菜々花の元まで移動するとそのまま彼女の足の間に体をスッポリと収めた。そしてあこの後ろから菜々花が両腕を回し、しつかりとホールドする。

「快適だわあ〜」

小さな子の温もりを感じながら、先程よりもさらにだらけた表情を見せる菜々花。そんな彼女を羨ましそうに見ていた真琴は巴の方を向き、先程菜々花がしていたジエスチャーをした。

「ア、アタシはやらないからな!!」

巴が顔を真っ赤にして拒否すると、丁度インターホンが鳴り響いた。

「あ、もう皆来たから、アタシ出てくる！」

このままでは真琴に押し切られそうな予感がした巴は、一目散に玄関へと向かった。

「さてと、菜々花ー。夕飯の支度するよ」

「あとちよつとだけ！」

「今日はアフグロの忘年会やるんだから、蘭ちゃんたちを待たせることになるよ？」

「今すぐ作る」

蘭というワードに反応した菜々花は先程までの雰囲気から一変、いつもの調子に戻っていた。膝元にいたあこをどけ、真琴と一緒にキッチンへと向かう。今日の夕飯は鍋であるためそんなに時間はかからないが、人数が多いため1人では結構時間がかかってしまうのだ。

「この時期に忘年会って気が早くない？まだクリスマス前だけど…」
「練習以外で皆が集まれるのが今日だけみたいだよ。僕らは年末スキーに行っちゃうし、蘭ちゃんは色々忙しいんだって」

「成程ねえ。野菜切り終わったよ…あ、真琴。私もスキー行きたい」
「じゃあ混ざらないようにボールに入れといて。なら父さんと母さんに相談してみないとね。多分大丈夫だろうけど」

お互いに口は動かしつつも、手はそれ以上に動かしていた。後は鍋にスープと具材を入れるだけである。

「あ、でも部屋どうしよう。多分満室だった気がしたけど……」

「部屋割りどうなってんの？」

「父さんと母さん、巴とあこ、最後に僕で、3部屋かな」

「アンタは一緒の部屋じゃないんだ？」

アフグロメンバーが待つテーブルにカセットコンロを設置し、その上に用意した鍋を乗せる。片付けのためにキッチンへと戻る最中、蘭に飛びつきそうになっている菜々花の首根っこを掴み、強制連行した。

「うー、少しくらい良いじゃない・・・」

「後でなら良いから。話し戻すよ。最初は一緒の部屋で取ろうとしたんだけど、巴が・・・」「アニキと一緒に嫌だ」って・・・」

「何泣きそうになってんのよ。高校生なら当然の反応じゃない」

「昔は喜んでくれたんだけどなあ。ま、ということ、二人部屋しか残ってなかったから僕が一人でそこを取ってる訳だけど、どう？」

真琴がそう尋ねると、菜々花は「いいわよ」と即答した。

「分かった、じゃあ父さんと母さんにはそう伝えと・・・あこ、どうしたの？」

真琴がすぐそばにいたあこの存在に気付いた。

「何だか、お兄ちゃんと菜々花お姉ちゃんって恋人みたいだよね！」

「こ、恋人?!」

あこの爆弾発言に顔を真っ赤にしてうろたえる菜々花。隣に居た真琴も表情が固まり、動揺しているのか中々言葉が出てこなかった。

「えっ！真琴さんと菜々花さんって付き合ってるんですか!？」

「おう、これはいいことを聞いた〜」

「逆に付き合ってたのが不思議なぐらいの距離感だと思う・・・」
「でもちよつと意外」

アフグロのメンバーも恋人という単語に反応し、ひまりとモカがキッチンへと詰めかけてきた。それに対してテーブルに残った蘭とつぐみ、巴は一足先に鍋をつつき始めた。

「巴ちゃんは気にならないの？」

真つ先に駆け出しそうだった巴が一番落ち着いており、つぐみや蘭にとつてはそつちの方が驚きだった。

「うくん、菜々花さんだったらアタシはいいかな。それに、そろそろ彼女の一人ぐらいは作ってもらわないとつて思ってるからさ。ま、そのままゴールインしてくれた方がアタシとしては嬉しいけど」

「なんだかんだお似合いだもんね」

真琴と菜々花を襲う質問攻めは中々収まらず、最終的には高校時代の恥ずかしい話まで聞き出されたのだった。

第10話

アフターグロウの忘年会が終わって数日後。世の中はクリスマス気分である。とは言ってもまだイヴなのだが、それでも商店街などはかなり盛り上がっている。

「おっ、まごっちゃん！ひさしぶりじゃねえか！何してんだ？」

買い物を終えて帰る途中、顔見知りの人物に出会った。この場合は絡まれたの方が正しいかもしれない。

「妹が友達と忘年会をやるそうなので、そのための買い物ですよ」

そう言っつて両手に持っている買い物袋を見せる。それを見た男は、「そうかそうか」と笑顔で頷いた。

「相変わらず妹思いだなあ！ところでよ、今日はお前さん一人なのか？いつも妹さんか・・・ほら、あの綺麗な姉ちゃんがいるじゃねえか」「菜々花の事ですか？もう冬休みなので、予定が無い限り中々会わないですね。それにしても菜々花が綺麗だなんて、大将も随分お世辞が上手くなりましたね。女将さんにバレても知りませんよ？」

「ハッハッハ！それには及ばねえよ！あいつは今出かけてっからな。それよりも、お前さんは自分の心配をするんだな」

ニヤリとした顔で真琴の後ろの方をチョンチョンと指で示す大将。何事かと真琴が後ろを振り向くと・・・

「どうも、綺麗な菜々花でございます」

「大将、僕帰り急いでるんで、これで失礼しま「こら待ちなさい」うぐっ」

危機を察知した真琴が速やかにその場を離れようとするも、菜々花がその首根つこを掴んで阻止した。そして流れるように真琴を自分の傍まで引つ張ると、彼が持っている片方の荷物を自分が持ち始めた。荷物を菜々花に持たれて帰ることのできない真琴は、諦めたように抵抗を辞めた。

「ハツハツハ！まこっちゃん相変わらず姉ちゃんに弱いなあ！」

「大将、協力ありがとうございました！」

「おうよ！その代わりと言っちゃなんだが、また今度食べに来てくれよ。そんな時はサービスするぜ！」

「はい！」

菜々花と大将が会話を終えると、自然に真琴と菜々花が並んで歩き始めた。

「ちよつと真琴、LONEか電話どつちでもいいから出なさいよ。おかげでアンタ探すの大変だったんだからね？」

「だから大将が話しかけてきたのか・・・いつもは挨拶ぐらいなのに」「にしても、随分と沢山買ったわね。今日はRoseliaの忘年会でしょ？あの子たちって、そんなに食べる印象無いんだけど・・・」

菜々花が手にしている袋を見つめて言った。前回のアフターグロウの時よりも量が多いのは明らかだ。

「なんでもメンバーが家に一泊するらしくて、今日の夜と明日の朝昼の分が必要だとかなんとか」

「成程ね。で、もうこのまま家に帰るの？」

「帰りにコンビニ寄ってこうかと思ってるんだけど、荷物重いだろーし・・・あ、菜々花なら大丈夫か」

「重いなー！これは一回帰らないとダメかもー！私か弱い女の子だしー！」

「しゃーせー・・・おおー！マーさんにナーさんだー！珍しー」

「モカちゃんこんにちは」

「忘年会以来かな。いつもは大学のコンビニで済ませちゃうから、店員のモカちゃんに会うのは確かに珍しいね」

「いつも暇なので、たまには来てくれるとモカちゃんも喜びますよー」

荷物を置いた彼らは、予定通りコンビニに来ていた。何かを買うため、というわけではないが、今回はある人物に会いに来ているのだ。

「モカちゃん、リサちゃんは休憩中かな？」

「うーん、時間的にはそろそろ上がる時間ですので、もうすぐ出てくると思いますよー。もしかして、リサさんをデートに誘うんですかー？」

「そうそう。今回は思考を変えてお家デートってやつかな」

「おー、まさかの返しにモカちゃんびっくりですよー。それと、後ろの菜々花さんが怖いので、モカちゃんはこれにて退散ー」

モカはそう言うのと足早にレジを後にして、品出しを始めてしまった。残された真琴は後ろからの殺気に冷や汗を流しつつ、何とかご機

嫌を取ろうと彼女の好物を一通り籠に入れるのであった。

「真琴お待たせー……って、菜々ちゃんも来てたんだ！」

「リサちゃん久しぶり！たまたま真琴に会ってね、暇だから付いてきたんだ！」

「よく言うよ「あ？」……なんでもないです」

「あははは！相変わらず真琴は菜々ちゃんに弱いねー！将来は尻に敷かれるタイプかなー？」

リサが帰り支度を終えて出てくると、買い物を済ませて外で待っていた真琴と菜々花を発見した。そこで夫婦漫才を見せられ、バイトの疲れが吹き飛んだ。

「まあいいや。じゃあ、早速行こうか」

「あ、そうだ。今日は無理言ってホントごめん！」

「いいっていいって。これからもこういう事あるだろうし、前もって言うてくれればいつでも大丈夫だから」

「お、お邪魔しまーす」

「へえ、前来た時より結構片付いてるじゃない」

「いつも片付いてるからね？」

宇田川家へ戻ってきた3人は真琴の部屋へと来ていた。あまり慣れていないリサは落ち着かない様子だが、もう何十、何百回と来ている菜々花は当然の如く部屋を物色しはじめた。

「人数分の布団とか枕はこっちの棚に入ってるよ。電気がここで、明るさは3段階かな。寝る時は机を移動させたりしてスペース確保してね。あ、僕のベットも使っていいから。後は・・・菜々花みたいに引き出しとかはあまり開けないでもらえると嬉しいかな」

「ねえ真琴、もしかして部屋を貸すの？」

「そうだよ。あこの部屋に皆で集まる程のスペースは無いし、かと言って巴の部屋を借りるわけにはいかないし、リビングは母さんに駄目だっって言われちゃったから、じゃあ僕の部屋でいいかなって」

「じゃあ、アンタは何処で寝るの？」

菜々花の素朴な疑問に、真琴とリサが揃って「あっ」という表情になった。

「え？まさか何も考えてなかったの？」

「あまりにも話がスムーズに進んでたから、アタシも気付かなかつた・・・」

「そうだっ！巴と一緒に「やめときなさい」ちえく」

菜々花は真琴が提案した案をバツサリ切り捨てると、どうしたものかと考え始めた。

「真琴、アンタ私の家に泊まればいいんじゃない？」

「え・・・？」

第11話

「菜々花く、お腹空いた」

「はいはい、あと少しで出来るから」

「菜々花く、テレビのリモコン何処？」

「テーブルの上にあるわよ」

「菜々花く、課題見せて」

「嫌よ。てか、まだ私だって終わってないんだから、アンタはその後」
「菜々花く、トイレど」うっさいわね！今ご飯作ってんの！静かに待てないなら、アンタの分無しにしてやってもいいんだけど!!」そ、そんなに怒んなくても・・・」

とある家、菜々花の家の中から怒号が外へと響く。幸いお隣さんは家を留守にしているため苦情が来ることは無いが、怒られた真琴は、しょんぼりとした様子でテーブルに突っ伏した。

トントンと子気味良い包丁の音を聞きながら、向こうは大丈夫だろうかと思い、真琴はスマホを取り出した。画面にはLINEの通知が表示されており、アプリを開くと2人から連絡が来ていることが分かった。

一人は巴で、もう一人はあこである。巴はRoseliaのメンバーは仲良くやっていると聞いた趣旨の内容を送っており、あこの方はメンバーとの写真付きで現状報告だった。

写真は複数枚送られており、一枚目は食事風景、二枚目はリビングでくつろぐ様子、三枚目はパジャマ姿で寝床を用意している写真で、カメラ目線でリサと紗夜が恥ずかしさからかテンパっているのが分かる。

「皆仲良くやっているようで何より」

送られてきた写真を保存して返事を返すと、スマホをしまつて台所の方へと視線を動かす。真剣な表情で料理を作る菜々花。それを見

つめる真琴。その視線に気づいた菜々花は、彼に怪訝な顔を向けた。

「あんまりジロジロ見ないで」

「ああ、ごめんごめん。何作ってるのか気になっちゃって」

真琴の見たところ野菜や牛乳を用意していたあたり、シチューでも作っているのだろうかと思っていた。

「グラタンよ、グラタン。アンタ好きでしょ？」

「……………僕がグラタン好きなの、よく知ってるね」

真琴が驚いた顔を見ると、菜々花はムツとした表情となった。

「アンタ覚えてないの？」

「え？何が？」

「はあ、どうせそんなこつたろうと思った……………」

呆れたような顔をする菜々花に、意味が分からないと首を傾げる真琴。だが彼女の機嫌をさらに悪くしてしまったと思つた真琴は、ご飯が出来るまで大人しく大学の課題を進めるのだった。

「はいお待たせ。熱いから気を付けてね」

「おお……………」

目の前に置かれた出来立てのグラタンに、自然と頬が緩む。香ばしいチーズの香りと、グツグツという音がさらに食欲をそそる。両手を合わせて二人で「いただきます」と言い、スプーンで一口すくい頬張

る。

「・・・っ!!」

「いきなり頬張るからでしょうが・・・」

今日何度目かも分からない溜息をついた菜々花は、冷蔵庫から氷を取り出して手のひらに数個乗せると、そのまま真琴へと近づいて口の中に一つ放り込んだ。

「ふおんほはふへはい（今度は冷たい）！」

「しばらくそれ舐めてなさい。ったく、子供じゃないんだから。はむっ・・・あっっ！」

「ななはもほもひゃん（菜々花も子供じゃん）」

「う、うるさい・・・もう一個突っ込むわよ！」

多少のやり取りを交えつつ、グラタンを食べ進める二人。終始笑顔で食べ進める真琴を、作った本人である菜々花は多少照れながら見ていたが、真琴は気づいていなかった。

「ごちそうさまー。美味しかったあ！」

「久々にグラタン作ったけど、案外何とかなるものね」

「菜々花グラタン作ったことあるんだ？」

「ほんとに何も覚えてないの？」

「またも菜々花に問われるが、真琴はほんとに覚えていないらしかつた。」

「はあ・・・もういいわよ。先にお風呂入ってるから、覗かないですよ？」

菜々花は覇気のない様子で真琴にそう告げると、そのまま脱衣所の

方に向かってしまった。

「うくん、菜々花はどうしたんだろ？」

心当たりのない真琴はどうしたものかと必死に考えるも、やはり記憶に無いことはどうしようもなかった。

「そうだ、巴なら何か知ってるかもしれない」

ふと頼れる妹の存在を思い出すと、すぐさまスマホを取り出してLINEを開く。既に来ていた内容にすぐさま返事をし、巴に菜々花とグラタンについて知ってることは無いかと聞く。送ってから数秒後に既読が付き、返事を待っていると何故か巴から電話がかかってきた。

「もしも巴、どうしたの？」

「どうしたの？じゃないぞ兄貴！もしかして忘れたのか?！」

どうやら、巴は何か知っているらしい。

「うくん、不甲斐ないけど全く・・・」

「兄貴が忘れてるってことは、菜々花さん気落ちしてるだろうなあ・・・」

「巴ってエスパー？」

「兄貴はちよつと黙ってる。いいか？兄貴と菜々花さんがまだ高1のとき、一度家に来て菜々花さんが夕飯を作ってくれた時があったんだよ。その日あこは学校行事かなんかでいなかったけど、そのとき菜々花さんが作ってくれたのが、グラタンなんだよ」

真琴は巴から聞かされる昔話に、何かが思い出せそうな、引っ掛かったような感覚を感じた。

「実は菜々花さん、その時から兄貴の好物がグラタンだって気づいてたみたいなんだよ。アタシとあこは菜々花さんに言っていないし、父さんと母さんも言っていないってさ」

「・・・もしかして菜々花もエスパ―？」

「んで、まあ、その時のグラタンは・・・菜々花さんには悪いけど、お世辞にも美味しいとは言えなかったんだ。だけど、兄さんは美味しい美味しいって言って、ペロリと食べたんだよ」

「僕、その後体調崩してたりしなかった？」

大好物を食べたのにも関わらずにその記憶が無い事に違和感を感じていたが、真琴自体が物覚えの良い方ではないため、妙に納得していた。

「ピンピンしてたさ。しかも食べた後すぐ、菜々花さんのグラタンがまた食べたくなって言ってさ、正気を疑ったけど、菜々花さんは凄く嬉しそうだっぞ？」

「あー、何か思い出してきた気がする・・・」

「ま、後は菜々花さんに直接聞いてくれ。アタシ今日はつぐの家に泊るから、もう行くな」

「え、待って、お兄ちゃんそれ今初めて聞い・・・切れちゃった」

逃げるように電話を切られた真琴は、切られた理由が菜々花にアフグロメンバーでのお泊り会がバレないようにだと自分に言い聞かせた。

「とりあえず、菜々花に話を聞いてみよう」

思い立ったが吉日。いつものように菜々花と話をしようと脱衣所のドアを開ける。すると・・・

「え？」

「あっ……」

これまたタイミングぴったり。丁度菜々花が風呂から上がり、脱衣所に出てきていたのだ。しかもタオルは脱衣所にあるため、体を隠すものは一切存在しない。つまりは裸なのだ。

「えーっと……は、早かったね？」

「女子らしく長風呂じゃなくて悪かったわね……！」

怒りなのか羞恥からなのか、顔を真っ赤に染め上げた菜々花は、近くにあったタオルで前を隠し、大きく息を吸い込んだ。

「さっさと戻りなさい!!!」

「はいー！」

恥ずかしい過去でも掘り返されたのか、慌てた菜々花は再び顔を赤くし、今度は真琴の頭をポカポカと殴り始めた。

「ちよ、バランス崩れる！菜々花ストップ！」

「もうこれ以上思い出すな！忘れろおく!!!」

宇田川家ではRoseliaが、羽沢家ではAftergrowがそれぞれが楽しく騒ぐ中、こちらでも楽しく？騒ぎが始まった。

〈3年前〉

「お腹一杯……」

「あんなに食べるからだろ、兄さん」

「だって、美味しかったんだもん。巴もおかわりすればよかったのに」

「ア、アタシはほら、食べると体に出ちやうから……」

「豚骨醤油ラーメンが好きな人の言葉だとは思えないね」

「うつ・・・と、とにかくアタシは部屋に戻るからな！そんなところで寝て風邪ひいても知らないぞ!!」

「巴・・・行っちゃったか。分かっているけど・・・とにかく眠い・・・すすう・・・すすう」

「ふう、洗い物終わったー・・・って真琴？こんなところで寝てたら風邪ひくでしょ。起ーきーなーさい！」

「うう・・・すすう」

「はあ、食べ過ぎなのよ。巴ちゃんの反応で察しちゃったけど、あんまり美味しくなかったのに・・・一番早く食べておかわりもして、しかもまた食べたいって・・・はあ、昔っからアンタは人をその気にさせて。何で私を振ったのよ・・・」

気持ちよく眠る真琴の頭を撫でながら、菜々花は悲しいような、それでも何か期待するような複雑な表情をしていた。

第12話

新年を迎える準備として、冬の寒い時期始にはどの家でも大掃除を行っている。ここ、宇田川家でもそれは例外ではない。

「真琴起きなさい！今日は皆で大掃除をするって言ってあったでしょう？何時まで寝てるの!!」

暖かい布団の中で丸くなっていた真琴は、家族の中で最高権力を持つ母親によって叩き起された。

「早く着替えて降りてきなさい、分かった？」

「は〜い……」

母が部屋から出ると、真琴はそのそとベッドから出る。そして布団の中と部屋の気温差に身震いし、急いでダンスの中からジャージを取り出して着替えた。おぼつかない足取りで部屋から出ると、そのまま下のリビングへと向かう。

「あ、お兄ちゃんやつと来た！」

「遅いぞ兄さん！目覚ましかけたんじゃないのか？」

「う〜ん、一回起きたけど、眠かったから寝ちゃった」

そこでは先に掃除を始めていた巴とあこ、そして父と母がいた。

「真琴、取り敢えずそこにあるゴミ出してきちやつて」

「え〜……最後に纏めて出せばいいじゃん」

「掃除明日までかかりそうだから、今のうちに少しでも出しておきたいでしょ？家にゴミ置いときたくないし。あとついでにお昼ご飯買ってきてちょうだい。車使つていいから」

「はいはい、それじゃ行つてきます。あ、巴！後で皆の食べたいものリ

スト、L O I N Eで送つといて」

ベンチコートを羽織り、鍵と財布、スマホをポケットに入れてからゴミ袋4つを両手で持ってそのまま家を出る。外の寒さにまた身震いし、体を温めるために車の暖房を全開にしてゴミ捨て場へと向かった。

ゴミを出し終えた真琴は、そのままの足でコンビニへと寄った。店に入ると、この前聞いた気の抜けた出迎えではなく、はきはきした声が聞こえた。

「いらつしやいませー！あれ？真琴じゃん！」

「おはようリサちゃん。朝から頑張ってるね」

「さつき入ったばかりだけどね。今日は菜々ちゃんと一緒にやないの？」

「皆それ聞くね……。流石の菜々花も、年末は忙しいみたいだよ。一人暮らしたし、アパートの住民で大掃除してるんだって」

客が真琴しかいないため、レジをしているリサと軽く会話をしながら目的の物をかごに入れる。

「リサちゃんお願い」

「はい！あ、お弁当は温める？」

「そのままでもいいよ。リサちゃん、今日はだいぶフランクだね。何かいい事でもあった？」

「お、流石真琴！よく気付いたね。実は、バイトが終わったらRose liaの皆で遊びに行くんだ」

メンバー全員とは驚いた真琴だが、年末ぐらいは遊びたいのだからと考えた。

「成程ね。だからあこが急いでたんだ」

「何かあったの？」

「今日と明日で家の大掃除をするんだけど、そのときに自室も掃除するんだよ。本当は今日やろうと思ってたんだけど、あこが昨日手伝ってくれたって」

「妹の部屋を漁れるなんて役得じゃん。はい、詰め終わったよ」

リサの問題発言を聞きつつ、真琴は袋を受けとる。

「言い方……。ま、あこの部屋は物が多いから、結構大変だったけどね」

「あー、確かにそんな感じする」

「じゃあ、そろそろ行くね」

「うん、また来てね」

「ただいまー」

「お帰りお兄ちゃん！」

「あこ、遊ぶのもいいけど、時間まではしっかり掃除するんだよ？」

「分かってるって！……あれ？何でお兄ちゃん知ってるの？」

玄関で迎えてくれたあこの頭を撫でつつ、「リサちゃんから聞いたよ」と返す。皆が掃除をしているであろうリビングに昼食を届けると、そのまま自室の掃除へと向かった。

「さて、どこからやろうかな」

サッシや本棚の整理、小物の仕分け、やることは山ほどある。どれから手を付けようかと真琴が悩んでいると、いきなり巴とあこが部屋の中へと入ってきた。

「手伝うぞ兄さん」

「昨日手伝ってもらったお礼！」

「2人ともありがとう。でも・・・せめてノックはしてほしいな」

巴とあこの協力もあり、思った以上に早く掃除が終わった。その後リビングの掃除を済ませ、あこは約束があるので離脱。巴は真琴が買っている最中に自室の掃除を終えたらしく、家の残りは父と母がやるこのことで、残された2人は本格的にやる事が無くなってしまった。

「うーん、どうしよっか」

「そうだ兄さん、つぐの家に行こう！今日は冬休みの宿題をするってみんな集まってるんだよ」

「じゃあそうしよう。暖かいコーヒーも飲みたいしね」

行く先が決まった2人は、身支度を済ませて家を出る。家から羽沢珈琲店は割と近いいため、車を使わずに歩いていくことにした。

着いて早々、つぐみの元気な声が2人を出迎える。

「いらっしやいませ！あ、巴ちゃんに真琴さん、掃除終わったんだ！」
「巴とあこが手伝ってくれたからすぐに終わったよ。折角だし、皆集

まってるなら行こうかなって」
「皆あつちにいますよー!」

つぐみはAftergrowのメンバーが集まっているテーブルへと案内し、まだやることがあるのか厨房へと下がっていった。

席は6人席と大きく、蘭・ひまり、モカ・巴が向かい合うように座っており、巴の隣に真琴が座っている。

「琴さんまた会ったねー」

「相変わらず兄さんへの呼び方が安定しないなモカは」

「むむむ・・・モカちゃんがしつくりする呼び方が見つからないのだよ」

「ははは、好きに読んでくれていいからね」

唸るモカに苦笑いしながらどのケーキを食べようかとメニュー表を見てると、先程から落ち着かない様子の蘭が目に入った。

「蘭ちゃんどうしたの?」

「あ、いや・・・今日は菜々花さんいないんだなって」

「蘭は菜々花さん大好きだもんねー!」

「ひまり!そんな訳ないでしょ!?!真琴がいると大抵一緒にいるから、何処かに潜んでるんじゃないかって・・・」

菜々花に怯える蘭と、それを茶化すひまり。彼女の蘭好きにも困ったものだが、たまに蘭もまんざらではない様子を見せるため、これがツンデレというものなのかと感じた真琴は、密かに菜々花へと誘いのLINEを送ったのだった。

「そうだ真琴さん!私聞きたいことがあるんですけど、クリスマスは何をして過ごしたんですか?」

「うーん、特別なことは特に無かったよ。家族でご飯食べに行ったり、菜々花と買い物「菜々花さんとデートしたんですか?!」デ、デート

「というか・・・まあ、菜々花もデートだつて言つてたし、多分合つてるのかな」

「それでそれで、何を買ったんですか?!」

「ほとんど菜々花の買い物に付き合つてただけだよ。まあ、いつも通りなんだけどね。いつもと違うのは、クリスマスだったし、お互いにプレゼント買ったぐらいかな。後は映画やイルミネーションも見たり、レストランで夕飯食べたのかな」

真琴の言葉にメンバーの時間が一瞬だけ止まった。先に言葉を放つたのは蘭で、その口調は呆れたようなものだった。

「それ、もう完全に恋人じゃん・・・」

「これで付き合つて無いなんて・・・」

「信じられない・・・」

「甘々ですな」

流石幼馴染だなど真琴が息ぴつたりの返答に感心していると、たまに近くにいたつぐみも話を聞いていたらしく、聞くべきか聞かないべきかと迷いながらも、意を決して言葉を放つた。

「その、真琴さんは、菜々花さんの事どう思つてるんですか?」

「好きだよ」

『え?』

「またもやメンバーの時間が一瞬止まる。」

「あつ!友達じゃなくて、女性としてね?それに、菜々花の方も僕の事が好きだからね」

「え、じゃあ兄さん、告白とかはしないのか?」

「あはは・・・そのことなんだけど、かなり気まずくて・・・」

苦笑いを浮かべながら、言いにくそうに顔を反らす真琴。そんな彼を逃がすまいと、つぐみが彼の傍に立ち、巴と一緒に挟むような立ち位置を取る。

「真琴、ちゃんと説明して」

「そうですよ真琴さん！」

「マーさんお覚悟をー」

「私も気になります！」

逃げ道が無くなった真琴はわずかな希望を巴に託そうとするも、彼女は全て吐けと言わんばかりの顔で真琴を睨んでいた。

「うっ、誰にも言わないでね？」

『もちろん』

「はあ・・・菜々花と会ったのは中学1年生のころで、よく話すようになったのが2年生の時。で、実は3年生の卒業式の際に、告白されたんだ」

そして、真琴は濃密な中学3年間を語り始めたのだった。

第13話

（6年前）

「皆さん、入学おめでとうございます。早速ですが、これから出席を取ります。名前を呼ばれたら立って返事をして、そのまま軽く自己紹介もお願いします」

新入生のクラスを任された先生はテンプレ通りに学級活動を始めていた。一人一人が自己紹介をしていく中、度々大きな笑い声が教室内に響く。ある生徒は自らの体験談を、ある生徒は自慢話を、ある生徒は笑いを取ろうとして滑り、周りからのフォローを貰ったりなど、様々であった。

「じゃあ次、桜井 菜々花さん」

「はい。桜井 菜々花です・・・よろしくお願いします」

”桜井 菜々花”と名乗った少女は、その一言だけで座ってしまった。普通ならこの時点でクラスの輪から外れたようなもののだが、それまでの自己紹介のテンポが良かったお陰か、殆んどの人が気にせず盛り上がっていた。

「（はあ、もつとちやんと喋ればよかった・・・）」

ただ一人、菜々花はスタートダッシュに失敗して落ち込んでいた。さらに彼女は小学校卒業と同時に転校してきたため、それを心配してくれる友達はいない。それもあってか、さつきから顔は暗いままだ。

学級活動が終わり、その日はそのまま帰宅となった。周りがグループで帰る中、皆の記憶に残っていない菜々花は周りが帰るのを待っていた。その行動に特に理由は無いが、今までの友達と別れてからすぐに新しい友達を作りたいとは思わなかったのだ。

だが、そんな彼女に声をかける人物がいた。

「ねえ、桜井さん」

「えつと・・・ごめん、誰？」

声のした方を向くと、そこにはかなり深い紺色の髪をした生徒が立っていた。彼は手に鞆を持っており、これから帰ろうとしていることが分かる。

「あはは、やっぱ覚えてないかな。自己紹介は気の利いたこと言えなかったし。僕は宇田川 真琴。取り敢えず、今年1年よろしくね」

初対面で、しかも異性に話し掛けてくる真琴に、菜々花は不信感を抱いた。周りを見ても彼と同じグループであろう人物は見当たらず、かと言って自分と同じ転校生というわけでもなさそうだった。

「なんで、私に話し掛けたの？」

この言葉を言った途端、菜々花は「しまった」と感じた。折角向こうから話しかけてきてくれたのに、これでは台無しである。

「うーん、純粹に桜井さんと友達になりたかったんだ。僕友達いな・・・少なくてさ。妹に中学になったら友達作れって怒られちゃったんだよね」

「宇田川君は妹さんがいるんだね」

「うん。3つ下と、4つ下の妹がいるよ。2人とも凄く社交的でさ、友達が多いんだ。それと、僕のことには真琴って呼んでよ。妹たちがいるから苗字で呼ばれることに慣れてないんだ」

「分かった、じゃあ私のことも菜々花って呼んで。この苗字嫌いなもの」

この時のお互いのファーストコンタクトは決して良いとは言えなかった。

だが、初めてこの土地で出来た知り合いに、菜々花は不思議な何か

を感じていた。

それから数か月後、菜々花は少しずつではあったが話せる人を増やしていった。だが、気の許せる友達かと言うとそうでもなく、ただ単に暇な時間に話をするぐらいで、放課後に一緒に遊ぶなんてことはない。部活に入っていないのもその原因だろう。

しかし真琴だけは違った。彼は傍から見れば鬱陶しい程に菜々花に話しかけるのだ。それなのに彼女の機嫌が悪いときは、それを察してからか挨拶程度で済ませる。彼女がグループ活動などで孤立しうになると、浮いてしまう前に決まって真琴が声を掛ける。

菜々花はそんな彼との関係に心地よさを感じ始めていた。しかしその反面、彼に対してある一つの疑問が浮かび上がった。

「(あいつ、あんなにやさしいのに・・・何で友達いないんだろう?)」

「どうしたの菜々花さん?そんなに難しい顔して」

「っ!?! い、いきなり話しかけないでよ!ビックリするじゃない!」

「ご、ごめん! つい・・・」

頬杖を突きながら窓の外を見ていた菜々花だが、不意に真琴から声を掛けられる。いつもは急に話しかけても動揺しない彼女だが、今日は違った。考え事をしていたからか、それもあるが、悩みの種である本人が現れたことによるものの方が大きい。

「あ・・・ごめん、真琴君は悪くないの。それで、何の用?」

「何だか考え事をしてるみたいだから。よかつたら相談に乗るよ?折角の昼休みだし、有効に使わなきゃ」

「ありがと。でも、そんな大したことじゃないから」

「そう? 菜々花さんがそう言うなら気にしないでおくよ」

相談に乗ってもらうものではないため、ここははぐらかした菜々花は、気になっていたことを聞くことにした。

「ねえ真琴君。何で私にばつか話しかけるの？ あつ、勘違いしないでね？ 真琴君の事が嫌いな訳じゃないから。たまに鬱陶しいけど」
「鬱陶しい……。ゴホンっ。恥ずかしながら未だに他の友達が居ないんだ。僕、小学校のころから付き合ひ悪いからさ。ほら、学校終わったらさっさと帰っちゃうでしょ？ そんな感じで誘いを断るうちに、誰からも誘われなくなっちゃったんだ」
「用事があるなら、ちゃんと言えば分かってくれるんじゃない？」
「それが中々言いにくくてさ……」

難しい顔をする真琴に、菜々花は意地悪な顔を向けた。

「へえー。それ、私にも言えない？」

「うっ！ ひ、卑怯だよ……」

「大丈夫。どんな理由でも、私は真琴君の傍から離れないから」

そう言つて笑顔を見せる菜々花に、真琴は少しだけ頬を赤らめる。そして観念したかのように窓ガラスに背を預けた。

「実は、妹の面倒を見てるんだ」

「あー、良く言ってる巴ちゃんとかこちゃんだっけ？」

「そうそう。2人は僕と違って友達がたくさんいて、良くその子たちが家に遊びに来るんだよ。でも、結構頻度が高くてさ。母さんが毎日大変そうにしてたから、家で遊ぶ時は僕が保護者役のような事をするんだ」

「へえ、家族思いなんだね」

その理由を聞いて、菜々花は感心したような反応を示した。

「え、引かないの？ こういうのってシスコンだつて言われるもんだと……」

「そんなこと考えてたの？どっからどう見ても妹思いの良いお兄さんじゃない」

「で、でも！ 学校帰りとか遊びに出かける時とか心配で、小学校の時は何の違和感もなく付いてけたんだけど、今だとだいぶ厳しいというか、巴なんか恥ずかしいから付いて来ないでって言ってくるし・・・」

「あー、何となく真琴君の事が分かった気がする。もし妹に好きな人が出来たらどうする？」

菜々花の質問に真琴は間髪入れずに答える。

「勿論寂しいけど、巴やあこが決めたんなら僕が口を挟むことじゃないかな。まあ、気が気じゃないけどね・・・」

「もしかしなくても、真琴君はシスコンだね。でも皆が思うようなシスコンじゃなくて、心配性のシスコン。だから今みたいな妹ちゃんの仕事で取り乱してる君を見ない限り、シスコンだと思う人はいないと思うよ。だからもつと自信持ちなつて、シスコン君」

「そう思うんなら連呼しなくてもいいじゃないか・・・」

「ははは、ごめんって！」

唯一の友達である真琴の事を深く知れたと感じた菜々花は、ここに引越して以来、初めて心の底から笑っていた。

それから2年が経ち、菜々花たちは受験生となった。初めての受験ということもあり、皆がピリピリとした空気を発しているが、菜々花と真琴だけはいつも通りであった。彼らは2年次にクラスが離れてしまったが、奇跡的に3年でまた一緒のクラスになったのだ。

「真琴君、どこの高校受けるかもう決めた？」

「うん。〇〇高校を受けるよ」

「へえ、もっと上の所目指すと思ってた・・・。私もそこを受けるんだよ」

「じゃあ、菜々花さんとはライバルだね」

そんな返答をする真琴に、菜々花はジト目を向けた。

「そこは一緒に頑張ろうとかじゃないの？」

「ははは、冗談冗談だ・・・痛い痛い！ごめんって、だから腕つねらないで！」

「ふんっ！」

2人が目指している高校はレベルは高いものの、周辺で一番というわけではなかった。そのため元々勉強が出来た真琴は、菜々花の苦手教科克服に尽くしていた。

待ちに待った合格発表日。掲示されている番号を確認すると、見事2人の番号があった。嬉し涙を流す菜々花をなだめ、合格記念に夜までカラオケし、帰りが遅くて親に怒られた。

その数日後に卒業式があり、式が終わった後に真琴は菜々花に呼び出された。

「どうしたの菜々花？」

「えっと・・・真琴君、卒業おめでとう」

「うん。菜々花さんもおめでとう」

「そ、それでね！記念というか、その・・・真琴君のネームプレート、貰ってもいいかな？」

菜々花の要求を真琴はすんなりと受け入れた。制服に縫い付けられているプレートをポケットから取り出したハサミで切り取ると、それを菜々花に渡す。

「ありがとう。大事にするね」

「うん、そうしてくれると嬉しいよ。じゃあ菜々花さん、そろそろ行こ「真琴君っ！」な、何？」

学年の集合写真を撮る時間が近づいているため、戻ろうとした真琴を菜々花が呼び止める。

「すう．．．はあ．．．。あ、あのね！ 私．．．．．真琴君の事が好き！冗談じゃなくて、遊びじゃなくて、本当に好きなの！」
「．．．．．。」

菜々花からの予期せぬ告白により、真琴の頭が一瞬真っ白になった。

「迷惑だったらごめん．．．。」

「．．．迷惑じゃないよ」

「っ！」

「でも、ごめん．．．。」

真琴の返事に、菜々花は苦笑いを浮かべた。

「そう．．．だよね。ははは．．．。」

「菜々花さんの気持ちは嬉しいよ。でも今は「ごめん、ちよつと後ろ向いてて．．．!!」

言われるがままに真琴が後ろを向くと、すぐに菜々花が鼻をすする音が聞こえた。続いて必死に泣くのを我慢するように声が漏れ、そのたびに真琴を胸が締め付けられるような罪悪感が襲った。

しばらくして音が聞こえなくなると、「向いていいよ」と言われ、真琴はゆっくりと向き直る。目の前にいたのは目を赤くし、制服には涙の粒が残っている菜々花だった。

「私、絶対に真琴を振り向かせる！転校してきて．．．寂しい思いをしてた私にここまで優しくしたんだから、絶対に逃がさない!!」

菜々花はそう言い残すと、走ってその場を去っていった。
残された真琴は、携帯を開いた。

「もう、振り向いてるんだけどなあ・・・」

その待ち受けは、机の上で腕を枕代わりにして寝ている菜々花の写
真だった。

く現在く

話を聞いたアフグロのメンバーは、全員が真琴に冷たい目を向けて
いた。

「で、断った理由は何なんですか？」

「つぐちゃんから今までに感じたことのない圧が・・・」

「内容によっては容赦しないから」

「蘭ちゃんまで・・・」

今すぐにこの場から逃げ出したい真琴だが、逃げ道はつぐみによって塞がれているため逃げようにも逃げられず、頼みの綱である巴は彼の腕を掴んでいた。

「分かった言うよ……。菜々花の告白を断ったのは、菜々花と付き合いながら巴やあこの面倒を見ることは出来ないと思っただけなんだ。ほら、あの時まだ小学むぎゅっ……！」

理由を説明していた途中で、巴の右手によって両頬を挟まれた。

「何となく察した。全く……。兄さんは昔からあこやアタシに甘すぎるんだ。外食するときだって、何を食べるか迷ってたら片方頼んで分けてくれるし、何か欲しいものがあってもお金が足りなくて買えなかったとき、気づいたら部屋にそれが置いてあるし、何か頼んだって断ったことなんて無い。もっと自分の時間を、お金を、周りの友人を大切にしてくれ」

言い終わると同時に巴は手を離れた。

「巴……」

「ほんと、真琴はシスコンだね。早く菜々花さんの所に行きなよ」

「蘭ちゃん……」

未だに迷っている真琴に対して、アフグロのメンバーは無理やり店の外へと追い出した。外に残された真琴は、告白するまで家に帰ってくるなど巴からLINEを送られ、苦笑いを浮かべた。

「はあ……。あの時の事、正直に話したら怒られそうだなあ」

真琴は怒る菜々花を想像しながら、彼女の番号へと掛けた。

〽数日後（元旦）〽

「お兄ちゃん、行ってくるね！」

「うん、行ってらっしゃい」

新年早々Roseliaは練習があるらしく、あこは朝からスタジオオへと向かった。見送りを終えた真琴はリビングへと戻る。

「巴、暖房の設定高すぎるよ」

「うっ、だって朝だし・・・」

「だめ。寒いなら少し着込むこと。温度下げとくから、勝手に変えたら怒るよっ..」

「前までは何も言わなかったのに・・・」

ソファに座ってテレビを見ていた巴に注意をすると、上着を取りに渋々と二階へと上がっていった。

あの日以来、真琴は巴とあこに対して少し厳しくなった。と言つても、あこに対しては金銭面で。巴に対してはほぼすべての事に対してだ。

「さて、僕も行くのかな」

真琴も約束があるため、外出用の服に着替えて家を出た。車で向かった先はアパートである。駐車スペースに車を止め、階段を上がつてある部屋の前に行く。

ポケットから鍵を取り出して開ける。中に入ると電気は付いており、少しだがテレビの音が聞こえた。

「菜々花、そろそろ行くよ」

玄関先で呼びかけるも、返事は無い。ため息をついて部屋に上がると、テレビの前で毛布にくるまった何かが居た。

「ほら菜々花、起きてよ。もうそろそろ集合時間なんだから」

「うう、寒いから欠席で・・・」

「そういうわけにはいかないでしょ？ほら早くっ！」

菜々花を起こすために、毛布を取り上げようとする真琴。だが彼女は必死に抵抗して中々毛布を離さない。

「こうなったら・・・」

もう行かないと非常にまずいので、真琴は最終手段を取ることにした。毛布で体を包んでいる菜々花だが、首から上は完全に出ていた。横になっている彼女の上半体を起こし、さらけ出されている首筋を・・・

「私は絶対に外には出うひやあああああ!!!」

ペロツと舐めた。

「うう、まだ変な感じがする・・・」

助手席では気持ち悪そうに首筋をさする菜々花がおり、運転席では見事な紅葉を左頬に作った真琴が運転していた。

「菜々花は首筋弱いもんね」

「うっさい。あの時アンタが余計な事しなければこんな事には・・・」

「まあ、惹かれちゃったものはしょうがないよ」

「次舐めたら股間蹴り飛ばすから」

菜々花の睨みを効かせた警告に、真琴は口笛を吹きながら無視を決

め込んだ。

「それにしても、期間限定とはいえCircleでバイトすることになるとは思わなかったよ」

「バイトっていうよりかはお手伝いみたいなもんだけどね。まあでも、あの子たちの音楽活動を手伝うのって初めてじゃない？」

「そうだね。会場への送迎は別だろうし、新曲の感想を求められたこともないからね」

「じゃ、気合い入れてかないとね」

～END～